

在外研究報告（その1）

唐木 國彦

1987年3月31日から1988年1月30日までの10カ月間、アメリカ合衆国と西ドイツを中心に在外研究の機会をあたえていただいた。ここであらためて体育科のスタッフにお礼を申し上げておきたい。

帰国後まだ間もなく、必要資料が到着していないため、ここでの報告は研究経過の大略をのべるにとどめる。

I. 研究の課題

今回は「研究ネットワーク」づくりを課題にした。ここでいう「研究ネットワーク」とは、諸外国の研究者、大学、研究所などとの人的交流および情報交流の関係のことである。

私たちの研究対象であるスポーツは国際的なネットワークをもつ国際的な現象である。ところがその研究体制はいまだ国境を越えて組織化されていない。つまり、研究対象と研究体制とのあいだにギャップが存在するのである。このギャップを埋める予備的作業が今回の在外研究の課題であった。

II. 研究経過

1) 文献検索システムの調査

アメリカ合衆国ではカリフォルニア大学バークレー校、同ロスアンゼルス校、スタンフォード大学、ハーヴァード大学などにおけるスポーツ研究の文献検索システムを調査した。

また、昨年4月にラスベガスで開催された全米体育学会でスポーツ社会学、スポーツ史関係の研究者に直接インタビューした。

その結果、同一州の州立大学、姉妹大学などの限られた範囲でオンライン化が進んでいるが、全米規模ではまだネットワークができていないこと、科学情報のデータベースが商品としてひとつの市場を築きつつあることがわかった。細分化された専門研究の情報はいまだ人的なネットワークを通じて交流されており、そのほうが効率的であるよ

うに思えた。

2) 人的ネットワーク

多くの研究者、専門家との関係をつくるため、今回はいくつかの学会に参加した。すなわち、

- 全米体育学会（A A P H E R D、ラスベガス）
- 国際スポーツ史学会（H I S P A、グビオ）
- 労働者オリンピックアード・シンポジウム（アントワープ）
- 在外ポーランド人運動シンポジウム（ゴルフ）

これらの機会に知り得た研究者、専門家のネットワークをたどり、つぎの関係が結ばれた。

- 「日独伊枢軸国時代のスポーツ」研究プロジェクトの組織化
- 「日独スポーツ映像史」共同研究
- 西ドイツ専門誌『スポーツの社会・現代史』への外国人投稿ルートの開発。
- 『国際スポーツ社会学評論』編集委員会への直接投稿のルート開発。
- ホーヤ研究所（労働者スポーツ地域史）からの史料提供のルート開発。

3) 情報の提供

「研究ネットワーク」の原則は情報の相互供与である。その点で、まだ日本の情報は諸外国から供与されるほどには伝えられていない。その原因として従来から地理的な距離、使用語の制約などがあげられているが、日本の研究者の消極的な取り組みもあると思われる。

こうした反省から、今回は「日本の労働者スポーツおよび労働者スポーツ運動」のテーマで西ドイツのルール大学、ポーランドのゴルフ体育大学で講義をする機会をもった。

学生院生の反応はきわめて強かった。彼らはほとんど日本のスポーツについて情報をもっていないか、あるいは文部省、外務省の対外宣伝程度の情報しかもっていない。これは、これまで国際学会で報告された日本側からの情報の偏りにも原因があると思われる。なお、私の講義は当該国の専門誌に発表されることになっている。